

抗てんかん薬血中濃度が有効性と安全性におよぼす影響

関本裕美[†] 中澤 誉* 星田 徹**

IRYO Vol. 75 No. 3 (213-221) 2021

要旨

現在、わが国のてんかん薬物治療では、単剤療法で最大耐用量まで十分使用して効果を確かめ、効果が不十分であった場合に多剤併用療法の適応となる。本研究では、バルプロ酸ナトリウム (Sodium valproate : VPA) およびカルバマゼピン (Carbamazepine : CBZ) の臨床使用の現状、単剤療法と多剤併用療法の差異、多剤併用時におけるチトクロム P450 (Cytochrome P450 : CYP) の影響および血中薬物濃度が有効性と安全性におよぼす影響について検討した。VPAおよびCBZは単剤療法、併用療法ともに多く使用されており、VPAは全般てんかん治療、CBZは部分てんかん治療の第一選択薬である現状が確認できた。また、VPA、CBZともに単剤療法群での寛解率が高く、治療有効血中濃度以下であっても寛解する可能性が示された。しかし併用療法における血中CBZ濃度は用量依存的に増加せず、有効性と安全性の確認のためには血中濃度測定が必要と考えた。VPA、CBZの安全性については、単剤療法よりも併用療法の方が副作用症状の出現頻度が高かった。さらに、抗てんかん薬の効果や副作用の発現には個人差が大きいものと考えられることより、日常臨床では血中濃度を指標とした治療効果の判定や副作用の予防・早期発見に留意が必要と考える。

キーワード バルプロ酸ナトリウム, カルバマゼピン, 併用療法, 血中薬物濃度, チトクロムP450

緒言

現在、わが国のてんかん薬物治療では、単剤療法で最大耐用量まで十分使用して効果を確かめ、効果が不十分であった場合に多剤併用療法の適応とな

ることが多い。とくに難治性てんかんに対しては数種類の抗てんかん薬の併用が行われることが多いが、添付文書やインタビューフォームにおいて、てんかん治療に対する薬物療法の多剤併用時の情報は、単剤投与における情報よりもきわめて少なく不

国立病院機構神戸医療センター 薬剤部 (現所属:同志社女子大学 薬学部) *国立病院機構舞鶴医療センター 薬剤部, **国立病院機構奈良医療センター 脳神経外科 †薬剤師

著者連絡先: 関本裕美 同志社女子大学 薬学部 医療薬学科 臨床薬学教育研究センター
〒610-0395 京都府京田辺市興戸南針立97-1

e-mail : hsekimot@dwc.doshisha.ac.jp

(2020年3月3日受付, 2021年2月19日受理)

Effects of Blood Concentration of Antiepileptic Drugs on Efficacy and Safety

Hiromi Sekimoto, Takashi Nakazawa* and Toru Hoshida**, NHO Kobe Medical Center, * NHO Miuzuru Medical Center, ** NHO Nara Medical Center

(Received Mar. 3, 2020, Accepted Feb. 19, 2021)

Key Words : Sodium valproate : VPA, Carbamazepine : CBZ, combination therapy, blood drug concentration, Cytochrome P450 : CYP